

[禁煙社会] (上) 健康か客足か 迷う飲食店

煙苦手な人たちでダンス



(上) たばこの煙のない空間でダンスを楽しむ「禁煙サルサ」のメンバーたち。毎回100人程度が集まる（東京都渋谷区で）（下）「エアカーテン」で分煙する飲食店も。仕切り板の溝から天井に向けて風が噴き出す（東京・豊島区の「エピスカフエ」で）＝飯島啓太撮影

東京・恵比寿の路地にあるバー「リベロ」。カウンター10席のこぢんまりした店内に灰皿はない。バーには珍しい全面禁煙の店だ。

客のほとんどが非喫煙者。同僚女性と初めて訪れたという会社員（29）は「たばこの煙を気にせず、くつろげるのがいい」と満足そう。店主の秋山俊浩さん（50）は「インターネットなどで全面禁煙と知って来店する人が、少しずつ増えている」と話す。

秋山さんは1日2箱吸うヘビースモーカーだったが、4年前にぜんそくを発症したのを機に禁煙。だが、症状はひどくなるばかりで、医師から「受動喫煙の環境を改めないと命にかかわる」と言われ、2007年7月、店を全面禁煙にした。

「ぜんそくの発作がピタリとやみ、お酒の微妙な香りにも敏感になった」と効果を喜ぶ。しかし、禁煙だと告げると帰ってしまう客も多く、客足は以前の半分に減った。「いつまで店を続けられるか」と表情はさえない。



厚生労働省の調査では08年の日本人の喫煙率は21・8%で、5年前より5・9ポイント減った。飲食店などの分煙対策も多様化し、腰の高さほどの仕切り板から風が噴き出す「エアカーテン」、喫煙席の空気を1時間に約50回入れ替える空調設備なども登場している。分煙、禁煙に熱心な飲食店を集めた検索サイト「禁煙スタイル」によると、全面禁煙店の登録数は05年に全国で592店だったが、今年10月に1万2000店を超えた。

その一方で、バーや居酒屋などでは「たばこを楽しみながら酒を飲みたい」という客が多く、全面禁煙などの対策は進みにくいのが現状だ。

大手居酒屋チェーンの「ワタミ」（東京）は4年前、全面禁煙の居酒屋を都内や静岡県内など4か所に開店したが、いずれも客足が伸びず、1年以内に撤退。同社広報担当者は「宴会での利用と深夜帯の来店者が少なかったため」としている。現在は喫煙可能な店に衣替えされている。



「禁煙店が増えるのを待ってられない」と、自ら動き出した人たちもいる。禁煙を前面に打ち出して発足したダンスサークルで、その名も「禁煙サルサ」。

中米発祥のサルサは、ラテンの軽やかなリズムに乗って楽しむダンス。サルサが盛んなキューバは葉巻の産地だけに、「酒とたばこは付きもの」とされ、サルサが楽しめるクラブやラテンバーなどの飲食店には紫煙が立ちこめる。このため、「本場の雰囲気

ダンスを楽しみたいが、たばこの煙は苦手」という愛好者が「禁煙サルサ」に集まった。

活動場所は区民センターなどが中心になるが、ラテンバーなどを貸し切りにできる時は全面禁煙に。7年前の発足時は6人だったが、今や毎回約100人が参加する。代表の大島哲也さん（39）は「最初は『お子様サルサ』と言われてたりもしたが、確実に賛同者は増えている。活動を通じ禁煙空間の良さをアピールできれば」と期待する。



欧米に比べ日本は公共空間の「禁煙化」が遅れていたが、急速に対応が広がってきた。新政権誕生でたばこ税増税の見通しになるなか、昨今の「禁煙事情」を探った。

(2009年12月10日 読売新聞)

[禁煙社会] (中) 400万円で買った病気の体

「金銭面でも害」に気づいて



国会でたばこ税の大幅引き上げを求める駒木さん。24時間、酸素吸入が必要だ（東京・千代田区で）

「私がしたのは、400万円で病気の体を買ったのと同じことです」。東京・足立区の保健センターで先月開かれた「禁煙」をテーマにした講演会。同区在住の駒木光雄さん（70）が訴えると、参加者から驚きの声が上がった。

駒木さんは24時間、酸素ボンベが手放せない。慢性閉塞（へいそく）性肺疾患（COPD）のため、17年前から鼻に装着したチューブで酸素吸入しながら生活している。以前は1日2、3箱たばこを吸う生活を続けており、COPDと診断されてからも、しばらくはやめられなかったという。

18歳の時初めて買ったたばこは10本入りで1箱40円。記憶を頼りに、45年間の喫煙で消えたお金を大まかに計算してみると400万円を超えた。

駒木さんは、呼吸器に病気や障害を持つ地域の人らでつくる「足立サンソ友の会」会長で、禁煙啓発活動にも取り組んでいる。講演会などでは、自分がたばこに費やした金額を示すことで「健康だけでなく、金銭面でもたばこは害になると気づき、やめるきっかけにしてもらえれば」と願っている。

今月8日には、仲間と国会に出向き、民主党議員にたばこ税の大幅引き上げを要望した。政府は、たばこ税増税を検討しているが、1本当たり2～5円の小幅になりそうな情勢だ。1箱600円から1000円前後の欧米には、遠く及ばない。

「大人でも手を出しにくい値段に引き上げなければ意味がない。気軽に買ってしまうから出費がかさみ、最後は健康まで失うことになる」と駒木さんは力を込める。



喫煙が家計を圧迫しているケースは少なくないようだ。製薬会社「グラクソ・スミスクライン」（東京）が昨年10月、20～40歳代の喫煙男性300人に対し行ったインターネットによる調査では、1か月のたばこ代の平均は8910円。小遣いに占める割合が3割以上の人は37・3%、5割以上も11・3%いた。不況を反映してか、「禁煙に成功したら、たばこ代をどうするか」という質問に、最多の4割が「貯金」と答えた。

東京都内のファイナンシャルプランナー三輪鉄郎さんによると、20歳から60歳まで毎日1箱吸い続けた場合のたばこ代は、1箱300円として計約440万円。さらに、生命保険には喫煙していないことを条件に保険料が割引される商品があり、ある生命保険会社の場合、30歳から60歳まで加入すると最大167万4000円の割引になる。三輪さんは「禁煙すれば、節約効果はかなり大きい」と話す。

禁煙相談に応じている東京衛生病院（東京・杉並区）健康教育科長の宮崎恭一さんも、禁煙の手段の一つとして貯金を勧める。実際、宮崎さんが相談に乗った男性が、60歳でたばこをやめて毎日銀行預金を続け、そのお金で10年後に夫婦で世界旅行に出かけたケースもあるという。

「禁煙は容易なことではない。やめることに神経を集中するよりも、貯金など別の目的を設け、楽しみながら続けるほうが成功につながりやすい」と宮崎さんは強調する。たばこをやめたい人には、不況が味方になってくれそうだ。

（2009年12月11日 読売新聞）

〔禁煙社会〕（下）喫煙者は採用しません

「健康ならよい仕事できる」

入社後、会社施設の内外、就業時間の内外を問わず、喫煙は一切いたしません――。

長野県内などでリゾート施設や旅館の経営を手がける企業「星野リゾート」（長野県軽井沢町）は2006年度から、こんな一文を盛り込んだ誓約書への署名を新入社員に求めている。社員約520人の喫煙率は0%だ。

「禁煙のおかげで集中力が増し、作業効率が上がった」。こう振り返るのは経営企画部門に所属する秋本憲二さん（46）。喫煙ゼロを目指す社内制度がスタートした03年5月の喫煙率は26%で、秋本さんもその1人だった。

この制度は、5か月間禁煙外来に通えば診察費や薬代の半額程度にあたる約1万2000円を会社が補助し、禁煙に成功したら2万円の「祝い金」を支払うというもの。秋本さんは医師の指導に従い、「自分でも驚くほどスムーズにやめられた」という。

1年後に再び吸い始めてしまったが、すでに職場の喫煙者はごくわずか。「喫煙所へ行くため席を立つのが恥ずかしくて、制度を使わずにやめました」。07年には、喫煙する社員はゼロになった。

禁煙制度の責任者を務めた堀井伸一さん（47）は、「健康であればよい仕事ができ、分煙施設の設置費用も必要ない」と強調する。

◎

禁煙に熱心な企業はほかにもある。社内だけでなく通勤中も含めて禁煙としているのは、大手半導体・電子部品メーカーの「ローム」（京都市）。来訪者にも、禁煙をお願いしている。「快適な職場環境を提供するのは企業の務め」と広報担当者は話す。

厚生労働省が07年、全国の事業所約1万か所から回答を得た調査では、事業所全体を禁煙にしているのは24・4%で、前回調査（02年）から10・2ポイント増加した。職場環境が「分煙」から「全面禁煙」に移行している状況も浮かんた。

星野リゾートのように喫煙者を採用しないという企業は珍しいものの、社会の目が厳しくなる中、喫煙習慣は就職に不利という指摘もある。

就職指導塾「アカデミーコンサル」（大阪市）社長の高橋勝彦さんは、大手企業の人事部にいた十数年前、面接が終わり社屋を出た途端たばこをくわえた学生の姿が窓越しに見え、不採用にしたことがある。「営業先で同じことをしたらどう思われるか、社会人に必要な想像力が足りないと判断した」という。

現在は、スーツがたばこ臭ければ面接官に不快感を与えるとして、指導する学生に禁煙を勧める。

労働法に詳しい岩出誠弁護士は「喫煙を理由に不採用にすることは違法とは言えない。健康増進法では受動喫煙防止に努めることが義務化されており、喫煙が業務に支障をきたすおそれがあれば、企業側の判断が認められるのでは」との見方を示す。

今月5日、東京都内で開かれた就職フェア。会場の外でリクルートスーツ姿の学生がたばこを吸っていた。都内の大学4年男子（23）は「たばこが理由で不採用になるなんて本当にあるのか」と半信半疑の様子。別の3年男子（21）は「志望する会社の面接まで進めたら、やめようかな」とつぶやいた。

（この連載は赤池泰斗が担当しました）

（2009年12月12日 読売新聞）